北日本新聞　2019年1月13日付

TOKYO世代
五輪目指す期待の県勢

オフは映画鑑賞

拠点のルーマニアではホテルをアパート代わりにして暮らす。週1回のオフは「隣にお菓子とジュースを置いて」映画鑑賞を楽しむ。

水球4人きょうだい

4人きょうだいの次男。兄の航平さん(22)、姉の朱里さん(20)、妹の晴香さん(16)はいずれも水球選手で、国際大会で活躍している。

解体新書

体重あと10キロ欲しい

身長180センチ、体重80キロ。体格の大きい海外選手に対抗するため、体重は「あと10キロくらい増やしたい」。身長もまだ伸びているという。

海釣りが趣味

釣りが好き。富山では暖かくなると富山市水橋地区の海に出掛ける。「ルーマニアは海がないので釣りができない」と少し悔しそう。

会話は英語 夜に勉強

ルーマニアのチームメートとは英語でコミュニケーションを取っている。現在も「夜の30分～1時間は英語の勉強をしている」という努力家。

五輪への道 *Road to Tokyo*

2000年4月11日	富山市で生まれる	
07年ごろ	富山市堀川南小1年の時、富山スイミングパレスで水球を始める	7歳ごろ
13年3月	全国JOCジュニアオリンピックカップ春季大会の12歳以下の部で優勝	12歳
4月	富山市堀川中に入学。富山ウォーターポロクラブに移籍	13歳
16年3月	全国JOCジュニアオリンピックカップ春季大会の15歳以下男子の部で優勝。最優秀選手に輝く	15歳
4月	富山北部高に入学	16歳
17年9月	アジアエージグループ選手権に年代別の日本代表として出場し、優勝	17歳
18年4月	通信制の第一学院高富山キャンパスに編入	18歳
6月	ワールドリーグで得点王とベスト・ヤングプレーヤー賞を同時受賞	18歳
8～9月	ジャカルタ・アジア大会で日本の銀メダルに貢献。得点王に輝く	18歳
これから		
19年7月	世界選手権で日本のメダル獲得に貢献。得点王に輝く	19歳
10月	日本選手権で2連覇	19歳
20年	東京五輪で活躍	20歳

Eyes 記者の目

ポセイドンの救世主

日本の水球男子は、32年ぶりに出場したリオデジャネイロ五輪で、1次リーグ5戦全敗という結果だったが、世界との距離が着実に縮まっていることを印象づけた。

日本は体格で勝る海外勢に対抗するため独自の守備を編み出した。相手の前に出てパスコースをふさぐ「パスインディフェンス」、パスカットからカウンターを狙うスタイルを確立し、近年は世界の強豪とも肉薄してきた。

フィジカル面の差は依然として大きい。その中で戦績は日本の弱点とされる「個の力」で相手守備をこじ開けることができる。東京五輪について「ベスト8には確実に入っていかないといけない」と語る若き点取り屋は、水球代表「ポセイドンジャパン」の救世主となり得る。

水球　稲場 悠介（第一学院高富山キャンパス3年）

昨年、水球界に新風を巻き起こした高校生がいる。日本代表の稲場悠介(18)＝第一学院高富山キャンパス3年、富山市＝だ。6月のワールドリーグ（WL）、8～9月のジャカルタ・アジア大会でともに得点王を獲得した。「チームの中心になってきている自覚はある」。水球では2020年東京五輪の開催国枠が日本に与えられることが決まっており、若きエース候補の活躍に期待が高まる。

（社会部・野村達也）

国際舞台で得点王

アジア大会1次リーグの香港戦でゴールを決める稲場＝2018年8月28日、ジャカルタ（共同）

ブレークの18年だった。初めて日本代表となり、6月にあった主要国際大会のWLは6試合で14ゴールを挙げて日本初の4強入りに貢献。得点王と、最も活躍した若手に贈られる「ベスト・ヤングプレーヤー賞」を同時受賞した。夏のジャカルタ・アジア大会でも7試合で28ゴールをマークして得点王に輝いた。「思った以上に良い結果が出た。自分でもびっくりしている」と充実のシーズンを振り返った。

海外プロチームに在籍

17年12月から18年3月にかけて行った水球の本場モンテネグロでの武者修行が生きた。現地のプロチームに在籍し、当初は「強くてでかくて、迫力がすごい。こんなところでやっていけるのか」と思ったという。その中でも持ち味のシュート力とスピードを生かして食らいつき、もまれた経験が飛躍につながった。「体づくりはあまり意識しなかった」と言いつつ、この期間で体重が約5キロ増えた。

世界のトップレベルを肌で感じ、帰国後は「水球中心の生活を送ろうと思った」。競技に触れる時間を増やそうと昨春、全日制の富山北部高から通信制の第一学院高富山キャンパスへ編入。思い切った決断が成長を加速させた。10月の日本選手権はクラブチーム「プルポンウォーターポロクラブ柏崎」（新潟）のメンバーとして出場し、6年ぶりの優勝の立役者となった。

自身の武器を「肩と足の強さ」と分析する。キックで水中からの高さを維持しながら相手のマークを素早く外し、シュートを打てる。体格の大きな海外選手を前にしても1対1で勝負ができ、日本代表の大本洋嗣監督(51)は「ぶち抜いてしまう。今までの日本選手にいないタイプ」と評価。代表ではエースポジションの左サイドを担う。

富山市堀川南小1年の時に水球を始め、節目の全国大会では常に好成績を残してきた。4人きょうだいはいずれも水球選手で、特に意識をしたのが兄の航平さん(22)。先に日本代表となった姿を見て「悔しい。もっと練習しないと」とライバル心を燃やした。

WLでの活躍がスカウトの目に留まり、昨秋からはルーマニアのプロリーグでプレーする。水球漬けの環境でチームの主力を担い、5月までのリーグ戦を戦っている。春には強豪の新潟産業大に進む。

今年の大きな目標は7月に韓国で開かれる世界選手権。東京五輪の前哨戦という意味合いも強いこの大会で「日本としてベスト4。個人では得点王を狙う」と具体的な目標を掲げた。大舞台で、世界を驚かせる準備はできている。

毎月第2日曜に掲載